

人職甲べつ 了魅に技美

27日に開幕する「第70回正倉院展」（主催・奈良国立博物館、特別協力・読売新聞社）に出展される宝物に魅せられ、べつ甲アクセサリー作りの腕を磨く職人がいる。現代の名工にも選ばれた桜井市の池田柏藻さん(70)＝写真＝。今年も透かし彫りの新作を発表し、「奈良で古代から続く、べつ甲加工を後世に伝えていきたい」と話す。（辰巳隆博）



桜井・池田さん腕磨く



池田さんが正倉院宝物をイメージしてつくったアクセサリー。べつ甲に透かし彫りの飾りを施す作業。熟練の技術と絶妙の力加減が求められる（いずれも桜井市で）

銘感に工細鈿螺 物宝

第70回
正倉院展

池田さんは貝彫刻職人だった兄の紹介で、中学卒業後の1964年からべつ甲職人を目指して、大阪市内で修業を始めた。74年に独立し、古里の桜井市内に工房を設けた。

池田さんが感銘を受けた宝物は、べつ甲を貝や寶石で飾った「玳瑁螺鈿八角箱」。初めて見たのは86年の正倉院展だった。螺鈿細工の精巧さに「どうやって作ったのだろう」と驚いた。

貝の装飾を施す技法は、べつ甲を彫って埋め込むか、漆で貼り付けるかのいずれかだ。似たデザインのものを制作しようと試みたが宝物は螺鈿の隙間が狭

く、埋め込みは難しい。貼り付けるにも、漆の跡が周りに染みて、思い通りにいかなかった。

べつ甲はウミガメ・タイマイの甲羅だ。タイマイは国際取引を禁止するワシントン条約の対象で、日本では93年から輸出入が禁止された。価格が高騰したこともあり、池田さんは再現の挑戦を中断したが、琵琶や如意の形をしたブローチやペンダントなど、宝物をイメージしたアクセサリーを作るようになった。

今年は、2012年に出展された「銅薫炉」から着想を得て、得意の透かし彫りで、花やハートを組み合わせた幾何学的な模様を描き、周囲には丸を円形につないだ「連珠文様」を施した。

27日からの正倉院展では「玳瑁螺鈿八角箱」が展示される。池田さんは「もう一度、宝物を目に焼き付けて模倣したい。職人として技術も上がった今なら、わかることもあるかもしれない」と、開幕を心待ちにしている。

工房を構える桜井市にあ

る上之宮遺跡(7世紀前半)では、国内最古のべつ甲の加工品が出土している。池田さんは「べつ甲細工は古

代から現代まで人々を魅了し続けている。桜井で作られ、技を伝えていきたい」と語る。